

太平洋戦争の記憶と日豪の「和解」

鎌田 真弓

一 「国民の物語」としての戦争

鎌田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。さきほどシーゲル先生がおっしゃってくださいるまで、今日ほどのように話をしようかと迷いながらもいました。といいますのは、『誰のための国際秩序か？』というテーマで、オーストラリアと太平洋戦争のことがどう関係があるのか、逆にいえばどう関係づけようかというようなことで悩んでおりました。それが、シーゲル先生からオーストラリアという話を聞いていいということ、それから歴史記載は重要なテーマだということですので、ちょっと安心してお話ができることになりました。

まずオーストラリアと日本との関係ですが、「問題がないことが問題だ」といわれるほど良好な関係を築いてきました。現在、アジアの地域主義が進展する中で、日豪関係を再検討みようという動きもあります。手前みそになります。オーストラリア学会でも九月三〇日「東アジアの経済統合と日豪関係」と題するシンポジウムを

開きます。その案内は入り口に置いていただいておりますので、どうぞお持ち帰り下さい。

地域主義が進展する中で日豪関係の重要性が認識されています。日本はより戦略的にオーストラリアとの関係を使うべきだという考え方が示されています。オーストラリアはアメリカの同盟国でもあるし、対中国との関係でオーストラリアは日本の出口をつくるというような考え方もあります。このような良好な日豪関係の中で、埋没している問題が恐らく、太平洋戦争であろうと思います。

戦争は「国民の物語」として、これは藤原帰一先生がおっしゃっています。一般的には、国家の戦争体験として選択的に語られているといえます。一般的には、国を守る行為としての賛美を生み出しやすい物語でもあります。日本とオーストラリアの関係の中で、かつて日本とオーストラリアが太平洋戦争でも交戦国であったという事実はあまり認識されずにきています。良好な関係にあったために、国家間関係の問題として取り上げられることがなかったのだらうと思います。

今日の対テロ戦争という状況の中で、特にオーストラリアにおいてみられるのですが、「外からの脅威に対抗する兵士の物語」が重要な意味を持つていて、「国民の物語」の中に多様な戦争体験が埋没してしまう、あるいは包摂されていくという状況が生まれているように思います。

そのような中で、国民というものに包摂されない戦争体験が逆に意識的に忘れ去られているという状況が生まれているようです。ですから、まず周辺から、戦争体験、あるいは戦争というものをもう一度見直す、あるいは、掘り起こしてみる重要性があるのではないかと思います。

二 日豪の非対称な記憶

一方、やはり太平洋戦争の話になりますと、日本とオーストラリアの間ではかなり非対称的な記憶があります。ですから、そういった非対称的な記憶で、日本が過去にどう向き合うかということをもう一度考える一つの機会として捉えるべきだと思います。幸いにも、日本とオーストラリアは良好な関係を築いてきたために、例えば韓国とか中国のような反日運動に進展しない、ある意味でいい状況があつて、そういった負の記憶が、新たな市民交流というものも可能にするのではないかと思います。

太平洋戦争の記憶の非対称性というものを考えてみますと、小泉首相の靖国参拝をめぐる論議にみられるように、太平洋戦争をどう

記憶するかというのは、日本にとつても新たな課題となつていくと思います。戦争を体験しない人たちも含めて、ある出来事を選択的に思い出したり忘れたりして語り継いでいるのですから、戦争の本当の姿がすべて記憶されるわけではありません。

「クニのために命を捧げた兵士の物語」というのが日本では戦後語られてこなかった。それが、いま再構築されつつあるのではないかと思います。このような中で、あの激戦地であつた東部ニューギニアをその時期に統治していたのがオーストラリアであつたということは知る人も少なく、日豪が交戦国であつたことすらあまり想起されません。あるいは、日本軍がオーストラリア北部を爆撃したり、日本軍の特殊潜行艇がシドニー湾で攻撃をしたということもほとんど知られていません。

他方、オーストラリアにおいては、この一五年ぐらいですが、特に太平洋戦争への関心の高まりがみられます。オーストラリアの中での太平洋戦争の記憶の中心は、ポートモレスビーの防衛戦と、もう一つが日本軍捕虜収容所の体験です。

現在オーストラリアでは、例えば Darwin Bombing とか、泰緬鉄道建設の難所だつたが Hellfire とか、Kokoda とか、そういった太平洋戦争物の一般向けの図書が随分出版されており、一般書店の棚に並んでいます。オーストラリア人にとつての太平洋戦争は、日本軍の脅威と戦つたオーストラリア兵の体験が重要なテーマになつていくのです。もう一つは日本の捕虜収容所、ここでは二万七、〇〇〇人のうち八、〇〇〇人が死亡しているのですが、その体験もやはり

忘れ得ないものとして記憶されています。

ですから、太平洋戦争は「国民の物語」としては日豪で共通するところもあるのですが、一方で明らかな非対称性がみられます。特に、オーストラリアでは現在、さまざまな追悼式典に参加する戦争の非体験者たちが増えていて、そのような式典とか戦争記念館の展示、メディア、学校教育で、日本軍の残虐性を疑似体験して、日本人である私に対して、日本人はこういうことをどのぐらい知っているのかということを問うわけです。また、こうしたオーストラリア人の体験に対するの無関心が、我々オーストラリア人を不快にするのだというコメントも聞きます。

こういう状況で、日本とオーストラリアの非対称性を指摘するだけでは十分ではないし、かといって、オーストラリア国民の選択的な戦争の記憶を日本人が共有するというのも難しい。あるいは共有すべきかどうかを検討される必要があると思います。

さきほども申しましたように、幸いオーストラリアにおいては、日本人の戦争責任というものを追求する声は強くありません。それは日豪が西側の諸国の一員として、あるいは経済的な補完関係に立って、その戦争の記憶を表面化させてこなかったからだといえます。

ですから、日中関係、日韓関係のように、太平洋戦争が日豪間でも大きな政治的な課題になつてくるとは考えられないし、反日感情が大きな課題となるということも考えられない。それどころか、太平洋戦争の関係者が日本との交流を積極的に進めようという動きも

みられます。良好な関係を築いてきた日豪だからこそ、共有できない感情を認識しつつ、負の記憶通じた市民間の理解は可能だろうと思います。

さらに重要なことは、戦争の記憶を共有する市民交流を通じて、埋没されがちな周辺部の戦争体験を思い出したり、継承していくことが可能で、それによって大衆の中に潜む修正主義に対抗する力、あるいは歴史の濫用といったものに対抗する力を持つのではないかと思います。

つまり「国民の物語」としての戦争は、選択的な記憶であるために、日本とオーストラリアに違いがあるのは当然のことだといえます。それは、必要に応じて思い出されたり、まったく忘れられていたりするわけです。私は、オーストラリアを研究しているので、きょうはオーストラリアを中心にお話ししつつ、太平洋戦争の記憶を通じての日豪の交流の可能性を考えてみたいと思います。

三 オーストラリアのアイデンティティと戦争

オーストラリアにおいては、特に第一次大戦の記憶が国家のアイデンティティをつくり出してきました。その中でも、重要なのが、ガリポリ上陸作戦です。これは多大な死者を出した作戦で、作戦としては失敗だったわけですが、オーストラリアの中では「ガリポリ」が国家構築のアイデンティティとして語られます。中でも、「アンザック」（オーストラリア、ニュージーランド合同軍）は、重要です。

四月二五日がそのガリポリ上陸作戦が始まった日であったわけですが、現在でもオーストラリアでは一番重要な祝日であり、各地で追悼式典が行われています。

そこで語り継がれているのが、オーストラリア軍の「兵士の物語」なのです。平等意識が強くて、陽気で機知に富んで、権威に対してこびることなく、勇敢で、決して仲間を裏切らない。そういうオーストラリア軍の兵士の気質がオーストラリア国民の特質として、神話化され、語り継がれています。

この第一次大戦の兵士の物語りのつづきとして、太平洋戦争が語られているわけです。しかも、太平洋戦争は日本軍の脅威、あるいは侵略に対抗した「正当な戦争」であるために、オーストラリアでは反戦の倫理は生まれていません。

一方、日本は太平洋戦争での敗戦を経験して、日本の戦争の物語はそこで断絶しています。日本の中では戦争そのものが否定され、反戦の思想が主流になってきたといえます。そこでは、日本軍の兵士も含めて、日本国民が受けた受難というものが物語の中心になっており、兵士の物語は「忘れられて」きた。そういった中で、靖国神社に兵士の物語が集約されていて、靖国神社への参拝問題は、その兵士のかつての物語をもう一度「思い出す」作業の一端としてみることができないのではないかと思います。

オーストラリアでは、この一五年ぐらいの間に、太平洋戦争だけではなく、戦争そのものに対する関心が高まっています。それは現在のオーストラリアの状況を反映しているのだろうと思います。い

まオーストラリアは二つの点で戦争の物語が語られやすい状況にあるといえます。

まず、オーストラリアは多文化社会、移民から成り立っている社会だということです。特に、戦後はいろいろな地域から移民がやってきています。その人たちが自分たちの体験として、経験しなくても語るることができるのが、戦争の物語なのです。とくに「アンザック精神」はオーストラリア人の特質とされているために、移民も歴史を共有することによってオーストラリア人観を共有し、体現することができま

一方で、そういった「新参者」の移住者は、家族の中にオーストラリアのために尽くした人たちがいないわけです。いまオーストラリアでは、戦争記念館に行つて自分の家族や親族の従軍記録を掘り起こすことがブームになっています。自分の家族の中に戦争体験者があるということは、オーストラリアに長い歴史を持つ家族である。そういった意味では、家族の戦争体験は「新参者」を周辺化する力を持つといえます。

二つ目は、先住民族との関係です。オーストラリアはやはりこの三〇〜四〇年ぐらい、先住民族の問題つまり、植民地主義による国家の歴史の問題を突きつけられています。世界ではかなり先駆的な政策もつくってきたと思いますが、その過程でオーストラリア国民は侵略者（加害者）としての負い目を突きつけられてきたのです。自分たちの国だと思つていたオーストラリア大陸は、実は先住の人たちがいて、その大陸から疎外感を味わわれる。そういった状況

を生み出しています。

第一次大戦も、第二次大戦も、海外派兵された人たちは、徴兵ではなく、志願兵でしたから、戦争の物語は、クニのために尽くした、つまりオーストラリアという国を守った国民としての正統性を回復する説得力を持ち得ます。

そういった二つの側面が、太平洋戦争のみならず、戦争の物語そのものがオーストラリアでの関心を集めている理由ではないかと思うわけです。

四 太平洋戦争の利便性

なかでも、太平洋戦争は特に「便利な」側面を持ちます。まず

第一に、日本軍の脅威に対抗した正当な戦争であったということ。

二〇〇五年の対日終戦記念日のスピーチでハワード首相が、「正当な戦争 (good & just war)」であったと述べたように、道義性があり問われることのない戦争であったということが重要だろうと思います。もちろん、第二次大戦では、オーストラリアは太平洋だけでなく、ヨーロッパでも戦い、例えばドイツ爆撃に加わった空軍兵士は四、〇〇〇人ぐらい死亡しています。ところが、太平洋戦争のように記憶されていません。

二つ目は、さきほどの第一次大戦の「アンザック」という、オーストラリア人の特質というものがそのままこの戦争の中でも継承されたことにあります。

三つ目は、女性の活躍が目立った戦争でした。ですから、銃後の守りだけではなくて、実際に戦争に参加したオーストラリア兵士、看護婦、そういった人たちのストーリーもこの中にうまく組み込むことができます。

四つ目。アジア地域を解放した戦争であるということです。オーストラリアは地域の解放に貢献した。しかも、戦後にオーストラリアに移住してきている人たちはアジアの出身者も多くいるわけですから、日本の侵略体験というストーリーのもオーストラリア人と共有できます。こういったアジアへの貢献という面を最大限に利用したのが、前の労働党政権のキーティング首相でした。

第五に、先住民も最後には北部防衛にはかかりましたし、パプア・ニューギニアの人たちも動員された戦争でした、現在まだ充分なストーリー展開はないのですが、現地の人たちも一緒になって、あるいは先住民も一緒になって戦ったといったストーリー展開も可能なのが太平洋戦争だろうと思います。

キーティング前首相は、太平洋戦争ではオーストラリアがアジアを守った、オーストラリアが貢献した戦争だという面を強調しました。一方、アメリカとの関係を重視しているハワード首相ですと、太平洋戦争で日本の脅威と戦ったオーストラリア兵の献身をたたえて、イラクでいまテロの脅威と戦っているオーストラリア兵のことに思いを馳せようではないかというような話の転換がみられます。

五 豪戦争記念館にみる太平洋戦争

それでは次に実際にオーストラリアの中で太平洋戦争がどのように語られているかという、一つの例としてキャンベラにあるオーストラリア戦争記念館の写真を持ってきましたのでご覧いただきたいと思います。これはオーストラリア版遊就館ともいえるもので、それが公的な記憶をつくり出す啓蒙的な装置として機能してきました。追悼記念館、博物館、戦史を編さんする調査機関という三つの機能を備えています。

したがって、基本的にはオーストラリア兵の体験、つまりオーストラリア市民ではなくて、オーストラリア兵の体験を記録し、それを追悼する場となっています。一般の市民が兵士として戦ったという点が重視されていて、なかでも、「名誉の戦死者リスト」には戦死者全員の名前がランクなしにアルファベット順に並べられていますし、一九九三年には第一次大戦で亡くなった無名兵士の遺骨をフランスから持ち帰って、ここに埋葬しています。

オーストラリアが参加したまままでの戦争はすべて展示があるわけですが、特に第一次・第二次大戦の展示が中心で、第二次大戦の展示では太平洋戦争の展示面積が大きいです。その展示の中の日本軍の存在感は大きく、ステレオタイプ化された日本軍というものが見られます。歴史家の研究をもとにしたものではありませんが、大衆の望むような歴史で、逆にいえば、大衆化した歴史認識を否定するような展示にはなっていないのではないかと思います。

これがその戦争記念館です。こちらが国会議事堂で、ここに湖があつて、ちょうど真正面に据えられているのが戦争記念館です。国会議事堂からみますと、反対側の丘のふもとの真正面に戦争記念館は据えられています。戦争記念館の周りにはいろいろな記念碑があります。この下が展示室、ここは戦死した人たちの名前が刻まれた回廊「名誉の戦死者リスト」があります、そしてこの正面にあるのが「追悼の堂」です。両方の回廊には、十万人以上の戦死者の名前が刻まれています。「追悼の堂」の中には、かつてはここに無名兵士の墓はなかつたのですが、一九九三年に遺骨が持ち帰られて、このような墓所となつていて、献花が行われています。毎日のようにオーストラリアの学校の社会見学があり、一日に二、三組ぐらの生徒たちが、こういった追悼式と献花を行っています。

戦争記念館の行事でも重要なのがアンザック・デイで、四月二五日にはオーストラリア各地の戦争記念館でこのような追悼式典が行われています。夜明けの追悼式典に始まり、その後こういった帰還兵のパレードが行われます。キャンベラの追悼式典はこの戦争記念館で行われます。最近目立つのは、このように子供たちがおじいちゃんの勲章をつけて、自分の勲章ではない場合は右胸につけるようですが、戦争を経験していない人たちが一緒にパレードをしている様子が見られます。

このように若い世代の参加が増えていくことから、現在戦争への関心が高まつていることがわかります。あるいは、戦争記念館では、この写真のような日本占領軍の記念式典が行われたり、あるいは

は、こういったいろいろな彫刻、これはサンダカン捕虜收容所の犠牲者の追悼碑ですが、庭園には多くの追悼碑があります。

またこの戦争記念館は、戦死者を追悼する場であると同時に、記念館として展示をする博物館にもなっています。入口にはガリポリ上陸作戦で使われた小舟が展示されていて、オーストラリア人ならば国民の物語としての戦争のイメージどおりに展示室にいざなわれる展示です。第一次大戦と第二次大戦が展示の中心で、第二次大戦の中でも床面積が大きいのが太平洋戦争です。

これが太平洋戦争の展示の入り口ですが、このように日本軍の軍服、軍刀が正面にあつて、日本軍を象徴する展示が見学者を迎えます。展示の中では日本軍の存在感はとても大きい。もちろんドイツ軍も展示されていますが、やはり日本軍の存在が大きい。こういった日本兵の遺品が多く展示されています。これはチャンギの捕虜收容所の小屋のかなり大きな模型です。サンダカン捕虜收容所および死の行進で亡くなった人たち全員の顔写真。ここでは生存者の証言のテープが流れています。この收容所では一、七八七人亡くなつて、生存者は逃げた六人だけです。

それから、これはカチンの收容所の開設記念の碑。それから、旭日旗も多く展示されています。オーストラリア人は「きれいだ」と言うのですが、効果的に使われているし、日章旗もあちこちに展示されています。軍刀も展示されています、戦争記念館の創設者であるピーン氏の方針に従つて、戦争記念館は「敵」を展示する所ではないので、日本軍の敗戦の象徴の軍刀は取り外すべきだという議論

があり、一時期取り外されてきました。ところが、一般の人達の要望を入れてまた展示されることになったそうです。

見学者が必ず足を止めるのがこの写真です。私自身は不要だと思つていますが、日本兵がオーストラリア兵をまさに斬首しようとしている写真。その横にはこの日本兵が書いたものではないのですが、「すばらしい一撃」と題した、別の日本兵が書いた日記の一文が添えられています。

これはバンカ島事件で一人だけ生き延びた女性、ブルウィンケル看護婦の銃痕のある制服。第二次大戦の展示の最後は戦争裁判と広島・長崎の原爆投下でしめくられています。ここでは原爆によって溶けたガラスとか、投下後の写真も展示されていますが、同時に戦勝を祝う楽しい音楽も一緒に流されています。

出口にはこのような記述があります。これは太平洋戦争だけではなく、第二次大戦の展示の総括であるわけですが、「五〇〇〇万人の死、オーストラリア人が四万人。戦争が引き起こした苦痛ははかり知れない。連合軍の勝利は想像を絶する悪を倒した。我々が記憶する限り彼らの死は無駄ではない」という印字があります。つまり、ここ戦争記念館では、戦争の悪を訴えるのではなく、この戦争は悪を倒した正当な戦争であつたと、そしてその戦争で自己犠牲を強いたオーストラリア兵の死を記憶する、それがオーストラリア国民としての使命であると訴えています。

戦争記念館の展示にみられるように、公的なオーストラリアの戦争の記憶の中では、かなりステレオタイプ化された太平洋戦争とい

うものを見ることができません。例えばオーストラリアはニューギニアで日本軍の掃討作戦をするわけですが、展示の中に少しは書かれているのですが、それは不要なことではなかったか。つまり、放つておいても日本軍は敗退していて、掃討作戦をする必要はなかったのではないかと、といった問いかけはこの展示には出てきません。あるいはオーストラリアはニューギニアを植民地支配をし、現地人を徴用したわけですが、そういった歴史を知ることができません。あるいは、市民の受難もほとんど展示されていません。

六 日豪の「和解」

この日豪間の戦争体験は、現在のオーストラリアの、日本の脅威からクニを守った行為という面が強調され、テロの脅威からクニを守るオーストラリア兵のストーリーに転用されています。イラクではオーストラリア軍が自衛隊の警護を担当しましたが、それに対する反対の意見はあまりみられなくて、「かつては敵だったけれども」というただし書きが付きませんが、好意的にとらえられているというように思います。

オーストラリアとの太平洋戦争をめぐる負の遺産に対して、日本政府は積極的に「和解」をすすめようとしてきました。終戦記念日の式典では、昨年の六〇周年の追悼式典で初めて、日本大使が招待されて献花をされましたが、オーストラリアの戦争体験者と日本の隔たりは、大きなものがあります。日本政府はオーストラリアの帰

還兵連盟の会長を招待して、一行は横浜の連合軍墓地や直江津の捕虜収容所跡を訪問しています。

新たな市民間の交流も始まっています。一つはオーストラリアにあった日本兵が収容されていた捕虜収容所での追悼式典。かつて捕虜だった日本人が浮かけていつて、そこで慰霊祭をしています。オーストラリアの戦争体験者も、参加を拒む人もいるけれども、追悼式典に参加する人たちもいます。

カウラはかつてドイツ軍、イタリア軍、日本軍捕虜が収容されていた場所で、一九四四年八月五日一、〇〇〇人以上の日本兵が脱走する事件があり二三四名が死亡しました。オーストラリア兵も四名死亡しています。収容所跡の近くに日本人墓地があつて、現地の帰還兵連盟の人達の手によって維持されてきました。そして、日本とオーストラリアの友好のシンボルとしての日本庭園もカウラにつくられています。これはオーストラリア兵の墓地ですが、その横に、集団脱走事件で亡くなった日本兵の墓地がありました。いまではきれいに整備されて、オーストラリア各地で亡くなった日本兵も埋葬されており、毎年追悼式典が行われます。これが日本庭園です。現在は、カウラは日本とオーストラリアの和解のシンボルとなっています。

こういったことが可能なのは、実はこの事件がかなり周辺のなものであつたからだという指摘があります、時間がなくなつたのではしよります、すみません。一つには、この脱走事件はカウラ市民を巻き込んだ悲劇的な事件ではなかったということ。あるいは、ここ

では日本人の捕虜はかなり待遇が良かったということ。また、日本兵は、捕虜であることを恥じていましたから、偽名で収容されていた人たちも多く、戦後長く口を閉ざしていて、平実は知らされてきませんでした。

一方で、オーストラリアからみれば、カウラを通じた和解は美談としての物語性があります、敵であったにもかかわらずオーストラリアは敵の捕虜を手厚く葬っている。そして、その後、和解のシンボルとして日本庭園をつくり、市民交流も行われている、オーストラリアの学校の教科書にも使われるような題材でもあるわけです。

カウラは、人口が一万弱の、シドニーから三〇〇キロぐらいの所にある小さな町ですが、日本庭園の建設は観光開発という意味もありました。日本庭園の建設には、日本企業が多く寄附しています。そこから、日本との交流ははじまりました。ここから今度は直江津の捕虜収容所との交流が始まっています。日本各地に捕虜収容所がありました、特に直江津は三〇〇名のオーストラリア兵が収容されて、六〇人死亡したという収容所です。戦後の戦犯裁判で一番多く監視員の死刑判決が出た収容所でもあります。ここは長く地元市民からも忘れられていた存在でした。ところが、直江津で元捕虜だった人がカウラにいて、直江津で亡くなった人もあり、カウラで日本兵墓地の整備と日本庭園の建設のために奔走した人がそれを知って、その人たちの働きかけで交流が始まったと聞いております。特に、オーストラリア人のグリーン神父は、戦後日本に來られて奈良で亡くなられた方ですが、とても尽力されたと聞いています。グ

リン神父は戦後の日豪のかけ橋を築くために、オーストラリア国内にある日本兵の遺品の軍刀を日本の遺族に返還するという運動をされた方です。そのグリーン神父さまが、直江津での慰霊祭を行われました。それ以降、直江津の市民の有志が歴史を掘り起こし、それから元捕虜の人たちを招待しての慰霊祭を行い、元捕虜の孫の世代との交流も生まれています。ただ、こういった市民間のネットワークには個人の働きに依存するところが大きく、限界もあります。ですから、今後どのように進展するかは、私にはわかりません。

最後に、こういった戦争体験というものは国家の物語として選択的に、そして美化されて語られることが多いわけです。その中には多様な戦争体験というものは国家の記憶の中に埋没しがちです。例えば捕虜収容所の話であっても、旧ソ連や日本軍がどんなに残酷だったかという話はあるわけですが、そうではなかったつまり、親切にされたり、親しくなったりした事例ももちろんあるわけです。けれどもステレオタイプ化した捕虜収容所の物語には登場しません。捕虜が解放された後、地元の人たちが食べ物を持ってきてくれたとか、そういう話もちろんあるわけです。けれども、特に捕虜収容所のような場合は、日豪共に苦痛に満ちた体験が多いために口を堅く閉ざしてきた方が多い。そういった個人の様々な体験を語るような状況にするのは、このような市民の交流といった、プライベートな交流があつてこそ可能になるといえるでしょう。

つまり、国家間の和解とか、国家の体験といったものに埋没しないような戦争の記憶を掘り起こすことが重要で、それができるよう

な状況にあるのが、日本とオーストラリアの関係ではないかと思
います。

長くなりました。ご静聴ありがとうございました。